

中世都市鎌倉の環境

—地形改変と都市化を考える—

河野 眞知郎

KAWANO Shinjiro

(COE共同研究員)

はじめに

中世都市鎌倉についての考古学的研究は、この30年間で著しい進展を見せている。それは日本の中世考古学・中世史学の隆盛に触発されたことが大きい。また考古学が様々な自然科学的な分析手法を利用できるようになったことも研究を加速させている。しかし考古学内部から提起される鎌倉研究のテーマは、文献史学的なテーマを裏づけるか批判するかにこだわりすぎたきらいがある。

今回、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の中の「環境認識とその変遷の研究」作業班の共同研究員に加えていただくにあたって、この班のテーマに沿って、これまでに蓄積された鎌倉考古学の諸成果を、絵画資料なども加え、環境変化という視点でとらえ直してみようと思いついた。そこにはもちろん文字資料も活用されなければならないが、環境に直接言及した資料はごく限られる。本稿で試みる場所は、鎌倉という中世の一都市の環境解明のための、様々な手法の統合である。

検討する項目は、時間軸を考慮して以下の4項目にまとめた。

- 1) 都市のできる地形…源頼朝が鎌倉入りをする前後の地形と環境
- 2) 都市建設と地形改変…土地に対する加工によっておきた環境変化
- 3) 都市化による環境変化…人口集中と消費生活が環境に与えた影響
- 4) 都市衰退後の環境…15世紀中葉から近世にかけての環境変化

また手法として使用できたのは以下のような資料群の中にある。

- * 既刊の遺跡発掘調査報告書に記載された考古学的事実。
- * 上記報告書や類書に発表されている自然科学的な分析成果。
- * 鎌倉に関する絵図、地図類。
- * 文献史学的諸資料。

記述は上記1)～4)項目を順にたどる形としたので、各項の中で取り上げる分析手法の量は必ずしも一定しない。これは「わかるところから解明していこう」ということで、手法として使える資料が今後増加すれば、解明できることも増加する。手法の統合化といっても既存資料に依拠するわけで、「この点を証する資料はないのか」という欠損補足的な指摘はしなかった。

I 都市のできる地形

1 鎌倉の地形と堆積土

鎌倉は南を海に開き、「三方を山に囲まれた」と表現されることが多い。確かに、海拔100mに満たない丘陵が東・北・西の三方を取り囲む形となる（図6）。丘陵が開析された谷は方言で「やつ」と呼ばれる。中央平地は数本の川が流れる平野となっており、海に面してはかなり高まりをなす砂丘が発達している。この地形の地史的な成り立ちについては、縄文前期海進とその後の離水、砂丘背後の潟湖への泥炭堆積という形で理解できる（松島 1974）。

中央平野は鎌倉時代の都市の中核となる地であり、数多くの考古学的調査がなされている。そこで標準的に見られる土層堆積を、筆者はかつて模式図として提示した（図1，河野 1986）。第三紀凝灰岩の岩盤は平野中央では深くえぐられ（地質時代の河谷跡）、その上に海成砂の堆積がある。砂層上部は黒褐色粘質土（泥炭）へと漸移し、粘質土上部には奈良～平安期の遺構・遺物が認められることがある。粘質土上面は鎌倉期の生活面として利用されはじめ、中世から近世にかけてさかんに盛土造成がなされ、それは現代につづく。

このような地形・地層に中世都市が存在していたわけであるが、丘陵斜面に「やぐら」と呼ばれる墓地があり、谷戸の多くは寺院によって占められ、中央平地に武家地や町屋が密集し、浜は商業地・墓地となる。その東西・南北の模式断面図もかつて作成されている（図3，河野・清水 1993）。武士政権による人工的な都市も、地理条件に左右されて（あるいはうまく利用して）いる。

2 平安時代以前の鎌倉

上に述べたのは現地形と中世都市の概略であって、中世の都市的環境が成立する以前について少し詳しく触れておく必要がある。それは、古代までが自然地形を利用したにすぎなかったとは言えないからである。むしろ活発な地形改変がなされ、環境変化もおきていたと思われる。

古墳時代に由比ヶ浜に高塚古墳があったことは、明治年間に人物埴輪（男子武人と妾女とみられる女子像）が発見されたこと（辰巳他 2005）や、今小路西遺跡の奈良時代官衙（鎌倉郡衙と考えられる）跡で、勾玉や円筒埴輪片が出土した（鎌倉市教育委員会，以下教委と略 1990）ことから確かである。これらの塚は早くも奈良時代ごろには崩され削平されてしまったようだ。

奈良～平安時代前半には、平野西端部に鎌倉郡衙政庁が、のちに正倉群が設置されているが、政庁跡が正倉域にされる時、西側にそびえる丘陵の裾をカットし（法面をつけるが）南へ流す排水溝が掘られている。山裾を削る開発行為がかなり大規模になされ、植生変化を含め小地域での環境変化はおきたものと考えられる。またこの時期、鎌倉の平野のかなりの部分に水田がひらかれていたようであり、このことは中世より下層の土中からの花粉分析によって証明されている（表A，鈴木 1999）。水田跡そのものも、鶴岡八幡宮境内東端（鎌倉国宝館地点）で検出されている。典型的な谷戸田で、谷戸の細流を木製埋樋で導水するようにした、平安時代前期のものである。また、中央平野部のところどころで7～9世紀の居住跡も見出されている。

こうした人類活動は10世紀末ぐらいまででその痕跡を見出せなくなる。今小路西遺跡の郡衙正倉の上面には砂質粘土の薄い堆積が認められ、その層から11世紀には降らないと思われる土器が出土して

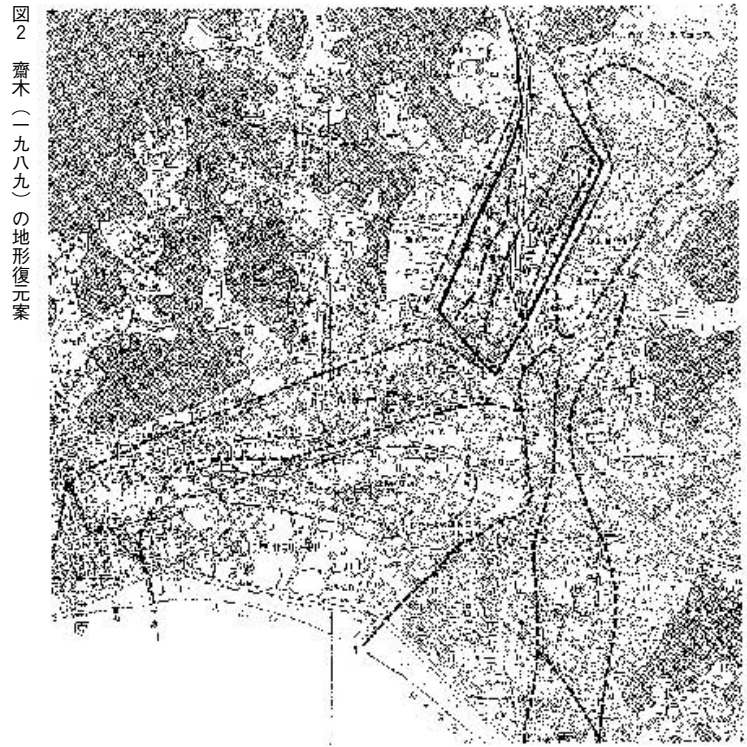
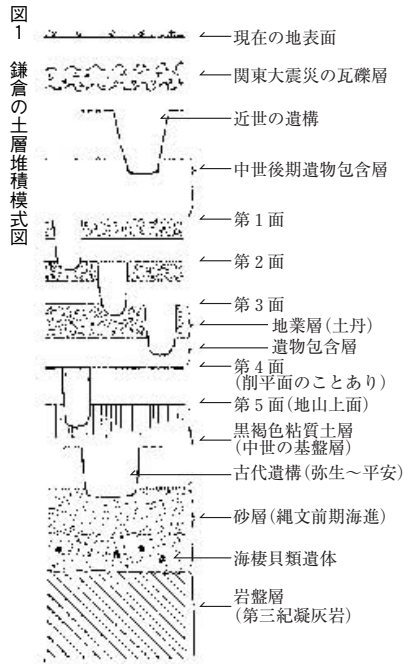


図3 鎌倉の東西・南北断面模式図



構成／河野眞知郎、清水栄穂



図4 土丹で舗装した道路と側溝
濠溝のくり返し

千葉地遺跡の道路断面図。A：初期路面（削平面）。B：第2次路面。C：第3次路面。D：最終路面。
1～7：側溝の掘り直しを示す。

いる（鎌倉市教委 1993）。おそらく中世に至る間に洪水（冠水と言うべきか）が何回かおきたのかもしれない。砂丘を貫通して海へ注ぐ滑川（鎌倉では最大の川）は、波浪による河口閉塞により、しばしば平野部に滞水をおこす。治承四年（1180）に頼朝が鎌倉に入った頃、「山人野叟の他卜居の類これを少なうす」（『吾妻鏡』－以下『鏡』と略す）と記されるのは、のちの都市開発と対比させる捏造との説もあるが、意外に実体であったかもしれない。

3 都市ののる基盤

前々項で潟湖内堆積の泥炭（＝黒褐色粘質土）が鎌倉期の生活面とされたとした。この粘質土層を、鎌倉で発掘調査に従事している者たちは愛称として「ネチャ」と呼んでいる。このネチャ上面の高さ（海拔標高）に注目して、鎌倉の都市成立期の地形を復元しようとする試みは、早くになされている（図2，齋木 1989）。しかしその時点では発掘調査例数は限られたもので、その後の調査の推移からは、齋木の推論は部分的に成功したにすぎないといえる。

そこで今回、ネチャの上面が検出された調査例を数多く集成すると共に、砂丘地帯の砂層最上部のレベル集成を加え、鎌倉時代最初期の平野部の地形（＝都市ののる地形）を描き出すべく試みを行なった。発掘調査地点はその発起する事情（開発など）によって、平野部に均等に存在するわけではなく、また粘質土層の上面レベルも当時の削平を受けていれば若干の低下をきたすし、砂丘の形成における飛砂の移動もあり、描き出された等高線はあくまでも目安といった程度の信頼性とどまろう。また等高線の収束する川筋については、発掘事例がないところでは現況位置を用いている。

〔図5〕として描き出されたところからは、以下のようなことが考えられる。

- * 中央平野北端は河流に分断されない高地となっていて、そこに鶴岡若宮が建立される。また、その南方の微高地には北条氏邸宅が占地し、のちには宇津宮辻子幕府、若宮大路幕府がのることとなる。
- * 若宮大路は微高地にのる形だが、南西部の砂丘地帯との間は河流の入る低地で落ち込む。今日でもJR横須賀線の「ガード下」は出水の頻発地である。
- * 平野北西部には「扇ヶ谷川」が滞留するような低地があるが、その低地でさえ鎌倉時代後期には宅地とされている。
- * 南西部は砂丘地形の発達が顕著だが、市街地としての開発は遅れたようだ。飛砂の舞う環境が嫌われたのかもしれない。なおこの砂丘高地上では7世紀頃の埋葬遺体が検出されており、古東海道がここを通った可能性がある。砂丘は往々にして滑川河口をふさいで、溢水を誘発したかもしれない（図7）。
- * 南東部の材木座一带は調査例が少なく等高線は描けないが、滑川の氾濫原（近代の埋め立てで今日は平坦に見える）以外では中世遺構が存在しており、平野中心部同様早くから開発されていただろう。九品寺周辺では砂丘の残存が現況でも認められる。
- * 大仏や長谷観音のある西端の谷戸は、地形的には中央平野とは別の水系に属し、鎌倉とは当初別地形と認識されていたかも知れない。鎌倉時代前期に稲瀬川が鎌倉の西の境界とされていたことはうなずける。
- * 鶴岡八幡宮より東方の大倉の谷は、等高線がかかるほどの調査例が得られていないものの、遺

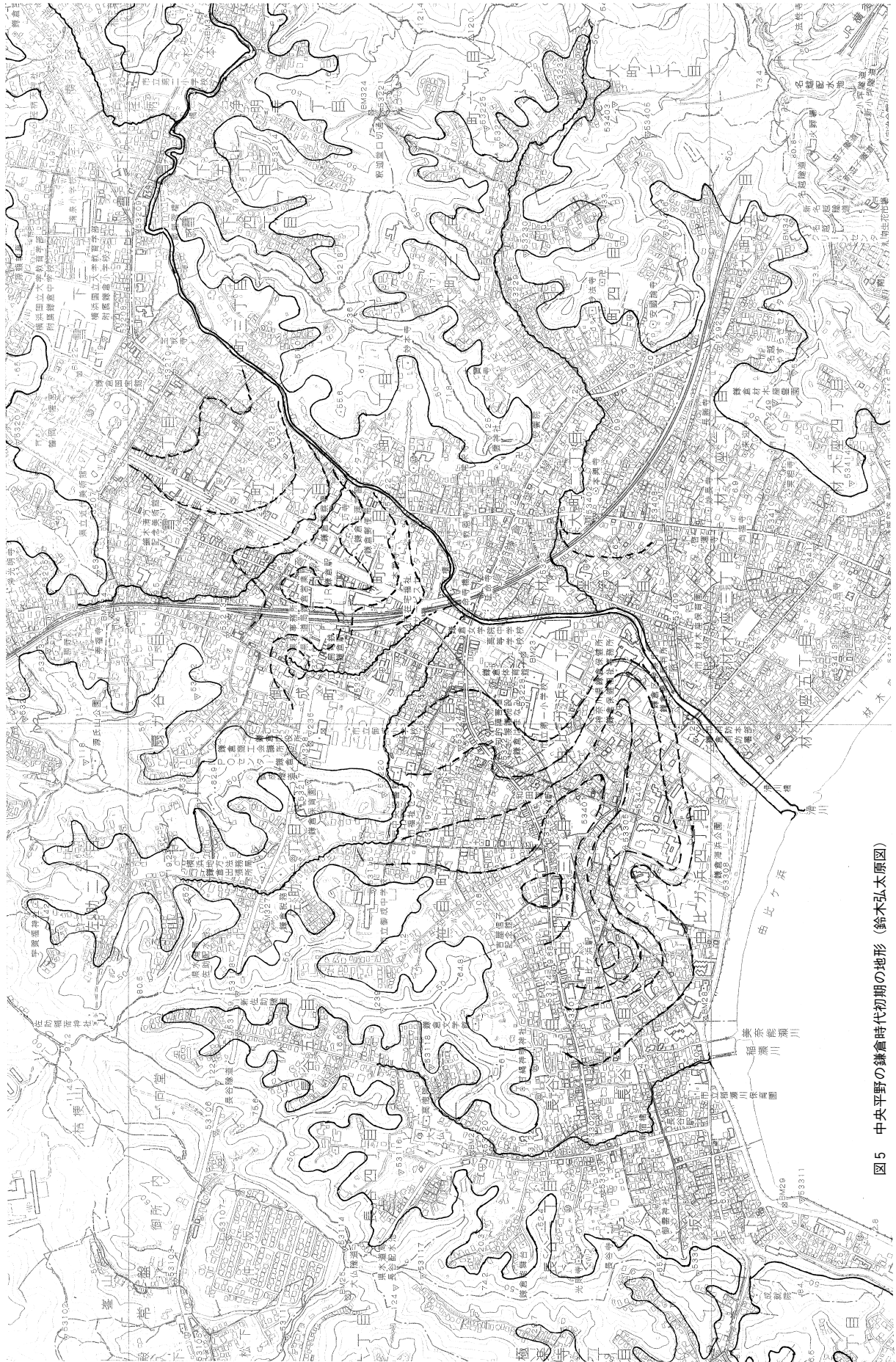


図5 中央平野の鎌倉時代初期の地形（鈴木弘太郎図）

構面の標高は10mを超えており、初期の頼朝邸（＝大倉幕府）や有力者の「宿所」が配されるに適した地といえる。

4 当初地形の問題点

源頼朝がこのような所に本拠を構えようとした動機として「三方を山に囲まれた要害の地」というのは、旧地形を復元してみてもいささか買いかぶりという気がする。後世都市が発展していくためには、平野の手狭さはさることながら、河流による凹凸のある地形は住宅開発を困難にさせただろうし、鎌倉時代初期の御家人の悪口に対する罰が道や橋を造ることであったことは、この地形に由来するだろう。大倉幕府や鶴岡八幡宮、北条氏邸が高燥の地を占拠したことは、後から来る者にとって条件の悪い土地があてがわれることを意味する。そして砂丘の存在が河口をせきとめると、市内低地のかなりの部分が冠水するはずである。事実『鏡』には洪水の記事が何回も認められる。たとえば寛元二年（1244）秋には「道路ことごとく水底となる」（『鏡』）とみえている。また、かつて水田の広がっていた低湿地では、掘立柱建物は不同沈下を起こしやすく、柱穴底に沈下防止の「礎板」をかませる工法が発達したと考えられる。

II 都市建設と地形改変

1 現況で見られる地形改変痕跡

鎌倉の山稜部に見られる切岸や空堀、曲輪、切り通しのごとき人工地形は、かなり早くから認識されていた。それゆえ、三方の山に施された加工を防御的なものとみなし、鎌倉を「要塞都市」とする見方もあった（たとえばかつて歴博に展示されていた鎌倉の地形模型など）。しかし、その加工が鎌倉時代初頭に集中する根拠は一切得られていなかった。

鎌倉市は平成7年度からの5年間、「山稜部詳細分布調査」を行い、人工的な地形の把握につとめた（鎌倉市教委 1996；1998；1999；2001）。調査されたのは山稜部の3分の1程度であったが、そこにはべた一面とって良いほどの加工痕が見出されている。図13はそれを一枚の地図上にまとめてみたものであるが、その多さは感じられよう。しかしながら、その加工がいつの時代になされたかの手がかりはほとんど解明されていない。加工時期として考えられるのは、鎌倉時代の都市建設期、南北朝～戦国時代の戦乱期、近世近代の開墾、戦中の食糧増産、戦後の宅地開発などがあげられる。

現況では山稜部は岩盤を覆う表土は薄く、所々に岩盤が顔を出す。戦後に杉が植林されたところも多いが、間伐がなされなかったため、倒木が多く荒れた印象がある。また里山であった所は、ヤブカラシ等による荒廃がみられる。また曲輪状の小平坦地には笹が繁茂し歩行もままならない。切岸とみられる崖は、岩盤の風化から崩落の危険箇所が随所にあり、コンクリートの擁壁に覆われるところが増えている。

こうしたところで平成12年、神奈川県と鎌倉市によって山稜部の試掘調査が行なわれている。谷あいの小平坦地や尾根上の平場からは茶毘跡やかわらけ等の遺構・遺物が検出され、極楽寺切通しの西方山上などでは鎌倉時代の遺構（仏法寺跡や五合枘など）も検出されている。しかし試掘箇所が限られているため、山稜部の人工地形の加工時期を明確にできるには至っていない。

図6 鎌倉上空西南方より——三方を山に囲まれた地形がわかる
(撮影香月洋一郎)



図7 若宮大路と滑川——川は砂丘に阻まれ蛇行する
(撮影香月洋一郎)



図8 鶴岡八幡宮の立地——右手前の上宮は山裾に造られる
(撮影香月洋一郎)



図9 永福寺跡——中央の不自然な平地が寺跡、
右上の山裾は切られている (撮影香月洋一郎)

図11 同左——崖下には「やぐら」状の
穴がある (撮影星野玲子)



図10 浄光明寺裏の崖——13世紀中葉の開削か
(撮影星野玲子)



図12 多宝寺跡最上段の掘削平場——石塔は安
山岩製 (撮影星野玲子)



図13 丘陵部の人工的な地形改変痕（主要なもののみ）（鎌倉市教委 1996；1998；1999；2001）

鎌倉の都市建設に伴う地形改変，ひいては中世の環境変化をさぐるには，以下のように考古学的調査と関連する追求手段を統合し，個別事例を面的に拡大するしかないようである。

2 寺社造営に伴う地形改変

源頼朝が鎌倉入りをしてすぐ着手したのが由比の若宮を「小林郷の北山」（現在鶴岡八幡宮の若宮あたり）に移したことであった。また勝長寿院，永福寺という寺を建立している。これらの寺院をはじめ，北条氏政権下で建立された寺々では，広い平坦地を確保するため，かなりの地形改変を行なったとみられる。それは旧来の地形を変えただけでなく，少なからぬ環境変化をも引きおこしたことであろう。ここでは，鶴岡八幡宮，永福寺，浄光明寺，多宝寺，仏法寺，金沢称名寺について検討しておく。

（1）鶴岡八幡宮

移転してきた若宮の社殿周辺には回廊や馬場が設けられていた。大臣山と呼ばれる丘陵の南麓の地をならして作られたのであろう。この地の東端，今日の鎌倉国宝館収蔵庫用地の調査では，中世基盤層たる黒褐色粘質土層の上に土丹（丘陵を形成する岩盤の凝灰岩を砕いたものをさす鎌倉方言）が厚く盛られていた。調査区内では岩盤削平痕は見られなかったので，より北方の丘陵を削った結果と思われる。なお土丹層の南端からは，土丹の運搬に使われたと思われるモッコ（竹ザル）が検出されている。また，今日の若宮の南前面の調査では，土丹を粘質土に搗き込んだ参道様の遺構が検出されている。さらに，この面の上層はくり返し土丹による造成が，後世なされている。

治承五年（1181）四月、頼朝がたまたま鶴岡に来たところ、「廟庭に荆棘あり、瑞籬草露にかくる」（『鏡』）状況だったという。新開の平坦地が雑草に覆われていたことが推測できよう。寿永元年（1182）四月には「鶴岡若宮の辺の弦巻田三町余の耕作を止めさせ、池に改めた」（『鏡』）という。頼朝の鎌倉入り直後にはまだ、のちの鎌倉中心街にあたる所に水田がのこされていたことになる。弦巻田というからには環状の田を意味しようが、鎌倉時代初期の地形からすると、大臣山の南麓の微高地の裾まわりが半円形をなすことと符合しよう。

寿永元年（1182）三月「鶴岡社頭より由比の浦に至るまで曲横を直して詣往の道を造る。（中略）武衛手自ら之を沙汰し、北条殿（時政）己下各土石を運んだ」（『鏡』）という。今日の若宮大路の築造開始である。土石を運んだということと、後に「段葛」と見えることから、道の中央を一段高くした「置道」と考えられるが、その土砂の供給元は大臣山南麓の開削と関連づけられよう。

さらに、建久二年（1191）四月「鶴岡若宮の上の地に始めて八幡宮を勧請し、宝殿を造営せらる」（『鏡』）という。これが今日の上宮に当たるところだが、その地形は山懐の小谷を掘り広げたようであり、また若宮との間には10m近い高低差があって「石階」が積まれたようだ（図8）。これも地形改変の一例とできよう。若宮南方の平地では鎌倉時代中期以降「鎌倉石」の切石を並べた遺構も検出されているが、切石利用については後述する。

（2）永福寺

鎌倉市北東部、二階堂に所在する廃寺址。頼朝が奥州攻めの後建立した寺で、平泉の栄華を模したとされ、建久三年（1192）に落成している。近代の地名の「二階堂字三堂」の地は、谷あいにしては川筋が東の丘陵際にあって、不自然な平地が広がっている（図9）。近世絵図でも「永福寺跡」とされる地で、20年にわたる発掘調査の結果、三堂が並び、翼廊が張り出し、広大な苑池とそこにかかる橋跡などが検出されている（鎌倉市教委 2002）。壮大な伽藍・苑池の造成に際しては、大規模な地形改変がなされたことが、発掘調査で確認された。すなわち、三堂の西背後の丘陵の裾は法面を残しつつも切り崩され、三堂裏手は岩盤削平面で、斜面との間には創建時から排水溝が穿たれている。三堂の東前面は黒褐色粘質土の削平面と土丹による盛土層から成っており、縄文時代の石斧や須恵器片が出土し、先史・古代的な山あいの環境は一変せられたと思われる。また山を開削した土丹は苑池の汀線や底面の地固めに用いられ、また中島の築造にも土丹の大型塊が使われている（図24）。池の堆積土の花粉分析からは興味深い結果が見られるが、それについては後述する。

（3）浄光明寺

鶴岡八幡宮より山一つ西方の谷（泉ヶ谷）に現存する真言宗寺院である。建長三年（1252）北条長時が開基となって創建された寺であるが、建武二年（1335）頃に描かれたと考えられる「浄光明寺敷地絵図」（重文）がのこされている。この絵図には伽藍建築も詳細に描かれているが、現在の本堂裏手の崖線（図10, 11）や薬師堂のある上段平場（図19）や周辺のやぐら、さらに山上の「綱引き地藏」（正和二年（1313）製作）の入るやぐらも表現されている。さらには寺の外周にある武家地が間口や奥の寸法注記つきで描かれていて、現況地形との対比はまことに興味深いものといえる。なんととなれば、この絵図に描かれたものに比定できる地形改変は、寺の創建から建武年間になされたことが確実に、鎌倉山稜部開削の時期判定に寄与するところ大である。その他にも、寺地西南方に描かれた町屋らしき家屋群、周辺の山容など今後検討すべき点は多々あるものの、現況寺地に対応する発掘調査は

望むべくもなく、考古学的対比ができないのは惜まれる。なお、寺院裏の崖崩れについては、寛喜二年（1230）大慈寺の裏山が崩れた例が『鏡』に見える。

（4）多宝寺

浄光明寺の東隣にあった廃寺。北条長時の弟業時が開基であり、律宗の寺と考えられる。南北に長くのびる谷地形は三段の平場に造成され、下段からは礎石建物跡が、中段平場からは多くのやぐらと共に受戒壇跡が検出されている。上段平場には高さ1丈におよぶ巨大な五輪塔が存在する。この上段平場は丘陵中腹に東西8m、南北6mの箱型の切り下げを施して開削されたものである（図12）。開削の時期は、この平場に立つ五輪塔蓮弁座より「覚賢長老遺骨なり、嘉元四年（1306）（後略）」と刻まれた蔵骨器がみつき、かつ平場の一角が茶毘の焼け跡を留めることから、覚賢示寂の1306年以前と考えられる。また五輪塔は安山岩製で、南都西大寺律宗と深い関係を持つ大蔵派の作とみられ、鎌倉西郊の極楽寺忍性（徳治元年（1306）没）の塔との関連が考えられる。覚賢の五輪塔はその一周忌に建立されたことが金沢文庫文書から知られ（金沢文庫 2002）、鎌倉での石材利用の時期を考える上で確かな指標となる。また、中段平場のやぐらの開削時期の手がかりも与えてくれる。ただ、これらの地形改変で出た土砂の行方についての手がかりはない。

（5）仏法寺

極楽寺中心伽藍より南方の丘陵の高位中腹、極楽寺坂切通しの西方において寺院跡と考えられる遺構が検出された。極楽寺にのこる境内絵図（元弘三年のものというが、描法からすれば近世のもの）には「靈鷲山」「仏法寺」「請雨池」といった注記があるものに相当しよう。発掘では山稜中腹を開削した岩盤上平坦地に、礎石建物と、岩盤に穿たれた池跡を検出している。池跡堆積泥中の珪藻分析からは、淡水産停滞水系の珪藻遺体が見ついている（鎌倉市教委 2003）。珪藻分析による水界環境の復元は鎌倉の発掘では未開拓である。仏法寺開創がいつかははっきりしないが、元弘三年（1333）新田義貞の鎌倉攻めのとき、靈（鷲）山は激戦地となっており、それ以前の地形改変の例としうる。この開削で出た土砂がどこに運ばれたかは知るすべもないが、海上からこの丘陵を見ると一種のランドマークになっていたのではないと思われる。

（6）金沢称名寺

鎌倉から朝比奈切通しを越えた、三浦半島東側の六浦北にある寺で、北条氏の一門、金沢氏の創建になる。ここにのこる鎌倉時代末の絵図は詳細な描写で知られる。昭和50年代の発掘では、池の汀線や中島、橋脚跡などが検出されて、絵図の正確さが裏付けられている（横浜市教委 1988）。古い発掘なので、池中堆積土の花粉分析は行なわれていない。絵図には境内西端の崖に穿たれたトンネルが描かれ、現在もそれを見ることができる。このトンネルは西の谷にあった「金沢文庫」に通じていたものと思われるが、金沢文庫跡の発掘では広範な土丹造成面が検出されている。また絵図には金沢氏墓所に登る石段の表現がなされているが、現在の地形では斜面として残されている。おそらく往時は境内のかなりの部分の雑木が伐採されて、広い寺地になっていたと思われる。その中で絵図には結界か何かの朱線が引かれていて、その「四至」の東南に当たるところには楓、北西に当たるところには杉林といった樹木が特に大きく描かれている。寺院創建に伴う地形改変だけでなく、樹木などの植栽を考慮させられるところだ。

3 「やぐら」開削による地形改変

「やぐら」とは鎌倉に独特な（と言われる）岩窟墓である。四角な墓室を崖に横穴状に穿ち、床の穴に火葬骨を埋納することが多く、その上に供養塔婆（五輪塔や板碑など）をすえることが多い。鎌倉市域では3000基近くが確認されているというが、実数はもっと多かろう。やぐらの分布は鎌倉を中心とし、西は平塚あたり、北は本牧周辺、南は三浦半島いっぱい、東は浦賀水道をこえた房総半島南部に広がる。このほか飛地として奥州松島や能登、加賀の一部に分布がある。造成時期は13世紀中頃から15世紀あたりと考えられている。同じ頃の鎌倉武士の本貫地たる相模や武蔵、下総・常陸・下野・上野あたりには見られない（同時期の火葬納骨墓や供養塔婆はあるが）。要は岩窟を穿つことが独特ということだろう。

やぐらの開削には、まず丘陵斜面を垂直に切り落とし、前庭平場を造り、次いで四角い岩窟を穿つことになる（図14, 15）。壁に残る工具痕からはツルハシ状の掘削具が用いられたと考えられる。鎌倉でやぐらの所在する所は先の図6と重なるところも多いが、地形改変ということでは重要なファクターとなる。

都市形成を進める側からすれば、幕府の仁治二年（1241）の「府中墓所禁令」によって、都市周辺の丘陵に墓地を求めたと言えようが、被葬者・供養者たる鎌倉武士の増加と造営期間を考えるならば、環境に与えた影響は少なからざるものがある。また無視しえないのはやぐら開削に伴って排出される土丹の量である。今、やぐらの平均的な大きさを幅2 m×奥行き2 m×高さ2 mとすると、一穴の容積は8 m³、そこから排出される土砂はかさが増えて12 m³ほどにはなるか。仮に鎌倉のやぐらが3000穴とすると、36,000 m³の土砂が山稜部から下方の平地に出されたことになる。これは寺院建立に伴う排出土砂に次ぐものであろう。また、寺院は谷戸地形を切り抜けることで造られるが、やぐらは山稜部の高い所にまで穿たれ、かつあちこちに散在するため、山の植生に与える影響はむしろ大きかったのではなかろうか。

このことは鎌倉の東の外港六浦においても顕著であった。近世の陣屋の西の丘陵、現在の金沢八景駅西にある「上行寺東遺跡」では丘陵の東と南の崖線は三段以上によるやぐら開削で岩肌がむき出しになっていて、かつ丘陵頭頂部には寺院らしき建物跡や池跡が岩盤に穿たれていた（上行寺東やぐら群発掘調査団 2002）。南の崖下は入江が入り込む湊となっていたであろうから、海上から眺めれば秃山は目立ったことと思われる。

やぐらが火葬納骨の場とすれば、遺体を火葬にした荼毘所（図17）も問題となる。たださほど広い面積を要したとは思われず、鎌倉の山稜部の試掘調査でも、所々に散在する傾向にあったと思われる（神奈川県教委・鎌倉市教委 2001）。地形改変ということではさしたる影響はなかったろうが、火葬に使った薪（燃料）が鎌倉周囲の丘陵地帯の樹木を供給源としていたら、200年間で数千穴（遺体数は万に及ぶか）に火葬骨を収めたのだから環境に大きな影響を与えずにはおこななかったろう。文献資料では『鏡』文治四年（1188）路上で頓死した窟堂の僧を「藁をもって火葬す」と見えるだけで、燃料問題は未解決である。

図14 やぐらのある崖——報国寺裏(撮影星野玲子)

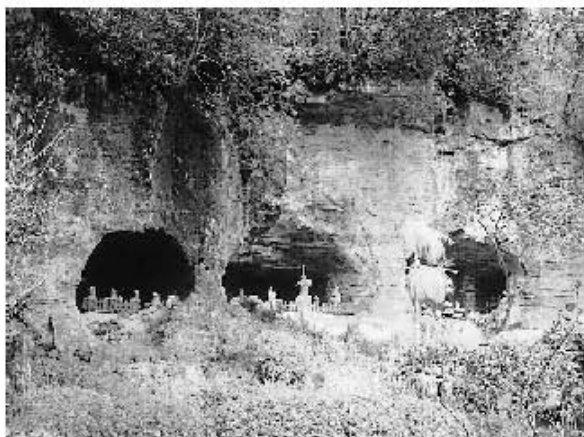


図15 やぐらの前面——「朱垂木やぐら」(撮影星野玲子)

図16 寺院裏手の切岸とやぐら——浄智寺境内
(撮影星野玲子)



図17 茶毘跡——永福寺杉ヶ谷 (福田 1993)



図18 十王岩付近にある石切跡——時期不明だが、近世の可能性
(撮影星野玲子)

図19 中世の崖下で行なわれた近世の石切跡——浄光明寺上上段
(撮影星野玲子)



図20 大仏切通し近くに見られる石切跡——時代不詳
(撮影星野玲子)



図21 鎌倉石切石を使った建長寺法堂跡
(撮影筆者)



図22 鎌倉七口のひとつ、大仏坂切通し
(撮影星野玲子)

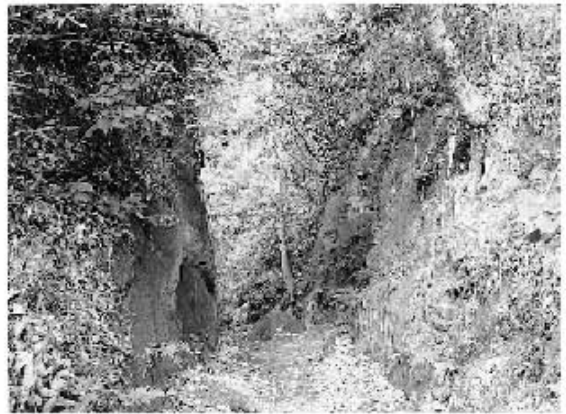


図23 釈迦堂トンネル——開削時期は不明
(撮影星野玲子)

図24 発掘された永福寺苑池——汀線の配石にはさまざまな石が使われる
(鎌倉市教委 2002)



図25 鶴岡八幡宮若宮前面に検出された参道状遺構——土丹敷き
(鶴岡八幡宮 一九八三)

図26 瑞泉寺裏の庭園
(撮影星野玲子)



4 交通路開削による地形改変

三方を山に囲まれた鎌倉に出入りする陸路は「鎌倉七口」（七というのは近世にできた名数であろう）として知られる「切り通し」を通ったと考えられる。『鏡』などではすべて「坂」と表記されるが、現況では峠の道路部分を切り下げた形とそれに続く坂道として確認できる（図22, 23）。七口のうち開削時期（改修かもしれないが）がわかるのは、仁治元年（1240）山内路（巨福呂坂）、六浦路（朝比奈切り通し）の造営決定（『鏡』）だけである。六浦道は翌年、縄を張って御家人に分担させたと知られる。おそらく所領の大小で負担が異なったのだろう。道路部分の切り下げ工事であるから面積的にはそう広いものではないが、丘陵の分水線を横断するので水脈や植生、動物生態には影響があったであろう。また掘削に伴って、排出された土丹の量も無視できなからう。大正12年の関東大震災のときには巨福呂坂新道が崩落で埋没したが、この土砂はトロッコで上河原（滑川の氾濫原）の埋め立てに使われたという。

5 石切りによる地形改変

鎌倉は、近世以降「鎌倉石」と呼ばれる礫質凝灰岩の産地である。この鎌倉石の利用は13世紀中頃からさかんになる。二階堂永福寺における第Ⅱ期（寛元・宝治年間）の基壇に使用されたのが早い例といえる。その後は建長寺法堂の床の四半敷や中庭の周囲、鶴岡八幡宮若宮前の縁石などに使われ、13世紀後葉には浜地に多い地下倉の土台石や壁石に大量に使用されるようになる。地下倉の石材は40cm×80cmで厚さ10cmほどの切り揃えられたものが多用される（図21および30）。また、やぐら内などにみられる五輪塔にも鎌倉石製のものが少なくない。文献では、弘長二年（1262）三浦の残党を亀谷・「石切谷」のあたりで捕らえた（『鏡』）とあり、鎌倉市内の山側に石切場のあったことがわかる。

市内の詳細分布調査では、あちこちに石切場跡がみつまっているが（図18, 19, 20）、遺構の時代の特定が困難であった。しかし、六浦の上行寺の北山では石切跡の上に富士宝永火山灰（1707年噴出）が堆積したのがみつきり（筆者実見）、名越切り通し東方の通称「大切岸」の崖下平坦地は石切場跡で、石クズ排土の上層にやはり宝永火山灰が堆積しており（逗子市教委による）、石切場でも中世に遡る可能性が考えられる。北鎌倉の亀井砦遺跡では石切場跡に15世紀頃のかわらけが出土し、中世の所産と確認された（浜野 2002）。

石切工事自体はさほど面積を要するものではなからうが（近世と思われる石切跡はたいてい小規模である）、凝灰岩地層の中の礫質部は厚さに限りがあり、14世紀前葉に浜地に多くの石敷地下倉が造られ膨大な量の石材が使われたことからすれば、地形改変ひいては山の荒廃につながったことはうたがいない。

鎌倉時代以降、近代にいたるまで鎌倉石の利用はさかんで（石垣や土台石に多用される）、現在鎌倉周辺の丘陵地の景観は後世の付加要素があることは考慮する必要がある。

6 土取りによる環境への影響

鎌倉市内の中世遺跡からは膨大な量のかわらけが出土する。集中的に廃棄された場所では1000個体をこえることもある。このかわらけを製造する素地の粘土は、胎土の蛍光X線分析により、市内の谷あいの粘土が使われた可能性が高いという（永田・福田 2001；2002）。その粘土を採集した痕跡は佐

助ヶ谷遺跡と今小路西遺跡とで14世紀前葉のものが検出されている（手塚 1989；河野 1990）。採掘坑が径2 m、深さ0.5mほどのもので、当時の表土でもって埋まっている。いずれも屋地をはずれたところであり、規模も小さく、植生や環境に大きな影響はなかったと考えられる。むしろ土器を焼く燃料の方が、環境への負担は大きかったと思われる。

7 地形改変と盛土の関係

上にさまざまな地形改変要因を見てきたが、いずれも土砂の排出を伴うもので、その排出土砂は街なかの埋め立て（盛土）に使われたと考えられる。とくに岩盤を掘削することで排出された凝灰岩破片は「土丹」というが、市内の発掘では土中に少なからず含まれている。寺社の堂舎のある場所や武家屋敷と考えられる居住地では、土丹を集中的に使って土地のかさ上げをする「地業」がなされていることが多い（図27）。また鎌倉市内の主要街路は土丹を粉碎して舗装路面を造り出している（図24および28）。一方、町屋地と考えられるところや浜地では土丹の盛土が見られることは少なく、盛土のなされる・なされないには社会的な力関係が働いていたと思われる。丘陵部の地形改変と土丹盛土とが、時間的に連続していたかどうかは立証不可能かもしれないが、三方を山に囲まれた一種閉じた空間では関連したことは疑いない。

盛土による土地のかさ上げは13世紀前葉には盛行しはじめるが、その原因はI章でみたような地形的制約による水害への対策であったろう。14世紀前葉の鎌倉の最盛期までには、数十cmに及ぶ土盛りがなされたとおもわれる。今回その上部レベル対比してみようとしたが、地業面（生活面）の時期判定に苦勞し、本稿には間に合わなかった。室町時代以降も寺社境内や宅地では盛土が続けられ、その結果現代では鎌倉時代初期の遺構面は現地地表下1～2 mにある。それだけ人為的に埋め立てられて現在の地形があるわけだ。

土丹等による広範な埋め立ては、当時の植生や生物環境に極めて大きな影響を与えたであろう。敷地内をかさ上げするには既存の建物を撤去し土丹を敷くのだから、広い荒野を造り出すことになる。建物再建後、庭などで花樹の植生も行なわれていたようだが（次章に述べる）、草本類の植生は一変したであろう。

元徳元年（1329）頃の金沢貞顕の書状の中には、安達氏の屋敷が改修中で空地となっていて、折からの火災が避けられたことが見える（『鎌倉遺文』30775）。一方、土丹盛土のなされることの少ない町屋などでは、「土泥棒」のような行為が横行したと思われる。井戸掘削や道路側溝の浚渫などで出た残土を宅地内に敷いたようで、時代の異なる陶片が同一層位から出土することが多々ある。また幕府の法令で「小路を狭めて町屋を造ることはするな」（寛元三年（1245）『鏡』）というのがある。これは道路に張り出して地下倉などを造ることを禁止したものだろう。いずれにしても町屋的な場は植物の生長がたびたび阻害されるので、都市的な荒れた環境を想定せざるをえない。

Ⅲ 都市化に伴う環境変化

鎌倉が最盛期には「過密」といってよい状態になっていたことは、発掘された遺構の密集度から容易に想像できる。大きな寺院では広い平坦地を有し、かつ方丈の裏に庭園がつくられていることもあ



図27 御成小学校内で見られた土盛り——下層は古代の基壇造成、上部3層が中世の地業層（河野他 1990より）



図28 土丹で舗装された鎌倉時代の道路跡（河野 1993）



図29 建物の周辺や床下に排気された大量のかわらけ——御成小学校内（河野一九九〇）

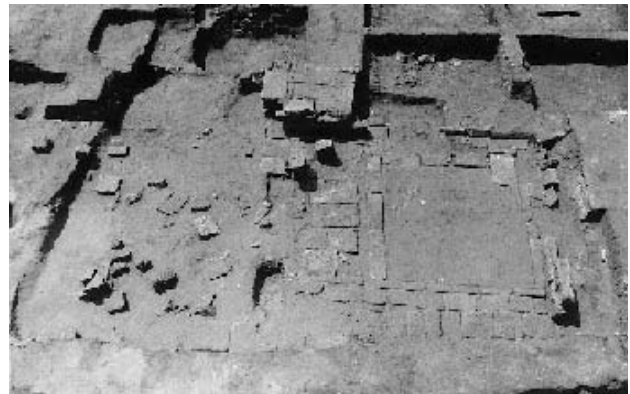


図30 鎌倉石切石を多用した「地下倉」——砂丘地帯には数多く見られる（河野 1993）

図31 鎌倉の街のなかで動物骨の散乱——犬の例、御成小学校内（撮影筆者）



図32 由比ヶ浜南遺跡での人骨集積——ときには動物骨の混入もある（齋木他 2002）

ったし、数戸主（一戸主は五十平方丈）も占める武家屋敷では敷地内に馬場や「広庭」を設けることもあった。しかし若宮大路の東西両側の高級武家屋敷地でも、軒端を接するほどに建物が密集し、ましてや町屋では狭い敷地に建物と作業場があって、あいた余地はまずない。出土遺物の面でも農耕具はほとんど出土しないので、空地を耕地化することもなかったろうと思われる。文献資料でも度々起きる火災で数十字から数町にわたる被災が記録されている。このような過密化は、北条政権下で徐々に進行し、得宗専制下で決定的となったと考えられる。逆に、新田義貞の鎌倉攻め以降は建築面積の矮小化と空地の増加が、発掘成果から認められる。

最盛期の鎌倉の人口はいかほどであったかについて、文献史からは寺関係で15,000人ほどで武士・凡下を含め数万が考えられている（石井 1989）。考古学的には寺関係の人口に加うるに、都市内の場の性格別に可住面積に世帯構成員数をかけて、5～10万という数値をはじき出した（河野 1989）。現在の鎌倉平野部（旧鎌倉地域とよばれる）の人口は、谷奥まで住宅地となっていて約7万である。鎌倉時代の市街地では、環境に対する人口圧力はかなりのものであったと思われる。またそこより糞尿をはじめとした廃棄物の問題もあったろう。

過密な都市の人口を支えて行くためには、大量の消費物資を搬入する必要があったはずだ。発掘調査の出土品からは、鍋釜や茶碗まで、各地からの搬入品であり、都市の周辺地域の自然環境からでは恒常的に物資をえることができなかつたと推察される。それでも眼前の海から若干の魚介類が得られ、三方を囲む山から柴や薪が得られたかもしれない。本章ではそのあたりを検討してみたい。

1 花粉分析による鎌倉の植生

1980年代からは日本でも「環境考古学」が幅をきかせてきた。鎌倉の発掘でも1地点数サンプル程度の花粉分析を行えるようになってきた。花粉分析の手法としては、ある層の土のサンプル中の花粉検出数の百分比である時期の植物相を見ることができ、何層かにわたる百分比の変遷が植物相の変化を表せるわけだ。しかし、1地点10サンプル程度の分析では、サンプル採取土層が時代的に連続ないしは時間推移をあらわすところでない、植物相の変化を把握することが困難となる。発掘調査担当者が適切な土層をサンプル採取用として指摘しないと、理科系の分析者の出す結果は有効でないことがある。

表A～Hに、なにがしか鎌倉の植生変化を語ることができそうな分析例のダイアグラムを掲げておいた。若干の問題点を指摘しておこう。

a) 水田のある風景－古代から中世都市へ

表Aは、鎌倉の西郊常盤の谷での発掘調査において、中世以下の層の花粉分析がなされた数少ない例の一つである。古代の層の時代ははっきりしないが、古墳時代の土器が少量出土しているので、古墳時代から平安時代にかけてのものであろう。草本花粉に占めるイネ科の花粉の比率は高く、水田のあったことが考えられる。同地点では表Bとしたプラントオパール（植物珪酸体）の分析も行なわれている。花粉分析では「イネ科」としか同定できないものが、ネザサ、ヨシ、ウシクサなども多くあって、イネそのものはそう多くない。他地点の中世層の花粉に「イネ科」が多いことはイネの存在だけではない。

同様のことは表Cに示した永福寺跡の花粉分析でも認められる。1192年の創建時からしばらくはイ

ネ科の花粉が多く、第Ⅱ期（13世紀中葉）以降はイネ科が激減する。永福寺は創建期から苑池を造っているから、イネ科花粉は周辺からの飛散かもしれないが、水田を含む環境が、13世紀には急激に変化したことを示している。

さきに鎌倉期の鎌倉の中央平野には耕地がなかったと述べたが、それは鎌倉盛期のことで、初期には平野部に田があったことが『鏡』に見えている。

- * 養和元年（1181）走湯山の僧に、鶴岡の西の方にある免田2町を与える。
- * 養和二年（1182）鶴岡若宮の辺の水田3町余を池に改める。
- * 寿永元年（1182）八幡宮寺の法師に甘繩の辺の田1町を与える。

「甘繩」という地名は今日では長谷に近い甘繩神明社のあたりをさすが、当時の文献の文脈からは鎌倉中央平野の西側部分あたりのようであり、後世安達氏をはじめ有力御家人の邸宅が並ぶようになる要地である。さらに、

- * 文治四年（1188）六月一日 頼朝の娘大姫の住いの山際の前栽で「田楽」を奏しながら「美女」に田植えをさせる。

この記事は誰かが耕作している田ではなく、宮中の儀礼同様、季節の祭礼的に行なわれたものであろう。これ以降、実際に鎌倉内で耕作される田の記事は『鏡』には見えなくなる。

b) 谷あいと丘陵の植生変化

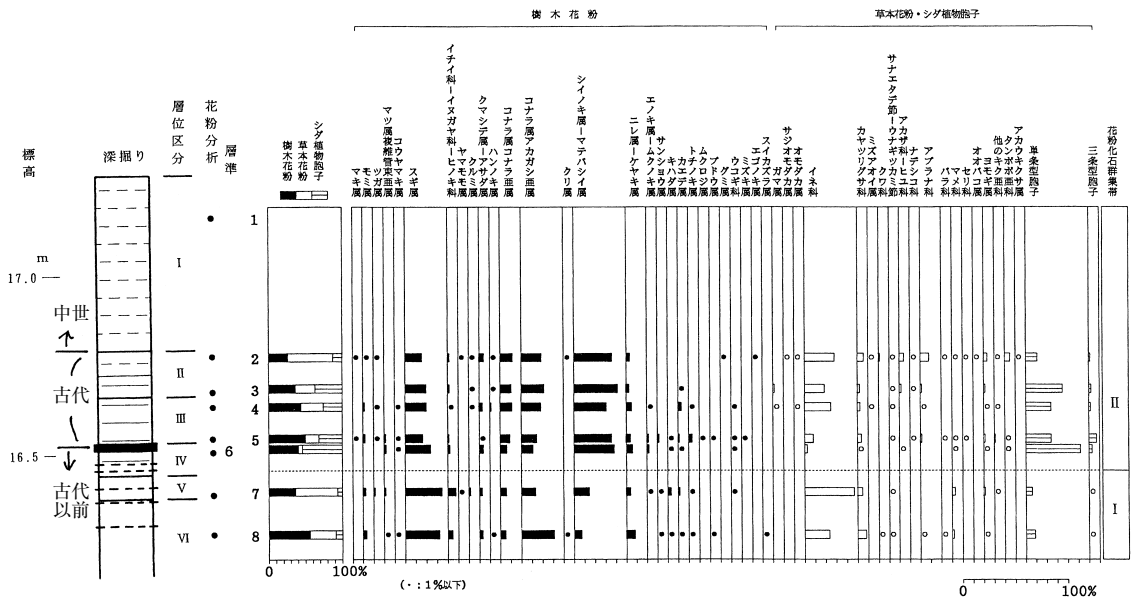
先にふれた永福寺跡の花粉分析のダイアグラム（表C）に目を戻していただきたい。第Ⅱ期の造成面の上と下では樹木花粉の比率が劇的な変化をみせている。すなわち、創建期とその上層では、スギ属・コナラ属・シノキ属が主であるのが、第Ⅱ期造成面より上層ではマツ属・エノキ属が圧倒するようになる。古代からあったスギ系の丘陵樹木が急激に伐採され、跡地にマツ系の樹木がはえたと解釈するか、寺院庭園の周囲にマツを植栽したのかは判然としないが、同様の傾向は表D-1、2の地点でもみられている。ここではスギ系からマツ系への転換は緩やかで、片方が圧倒するようにはみえない。

後述するように、鎌倉の街なかで使われていた用材ではスギが圧倒的に多く、周辺の丘陵樹木も消費せられたのかもしれないが、用材の大部分が地方から搬入されたことを考えると気候変動など他の要因に求めるべきだろうか。

c) 都市中央部の植生

表D-1・2、および表E、表F-1・2は、鎌倉の平野部で市街化の著しかったとおもわれる北条小町邸跡地点、若宮大路周辺遺跡群地点、政所跡地点の花粉分析ダイアグラムである。いずれの地点にも共通して言えることは、検出花粉は草本類が多く、樹木花粉が著しく少ないことである。花粉の飛散距離に谷あいも平野もそう差がないとすれば、水流による再堆積の可能性を考慮しない限り、樹木の少ない環境を考えざるをえない。宅地化された平野部には、家屋が密集していて樹木が少なかったと考えられよう。さらに草本類の花粉の中で目立つのは、イネ科はさておき、アカザ、ヨモギ、アブラナといった道の脇に生えるような雑草類である。さらには表E、表F-1・2にみられるように、溝中からはヒトの寄生虫卵が多く見られることも無視できまい（寄生虫卵分析まで行っている発掘地点は多くないが）。都市中央部では道の脇や塀ぎわに僅かな雑草が生えるだけで、溝には人糞が流れるような、都市的荒廃の環境を想定してもよいのではなかろうか。

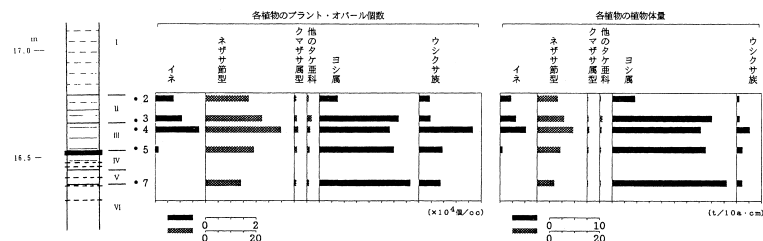
〔表A〕常盤；谷あい花粉分析——北条政村屋敷跡遺跡（鎌倉市教委 1994）



試料 1 g 当りのプラント・オパール

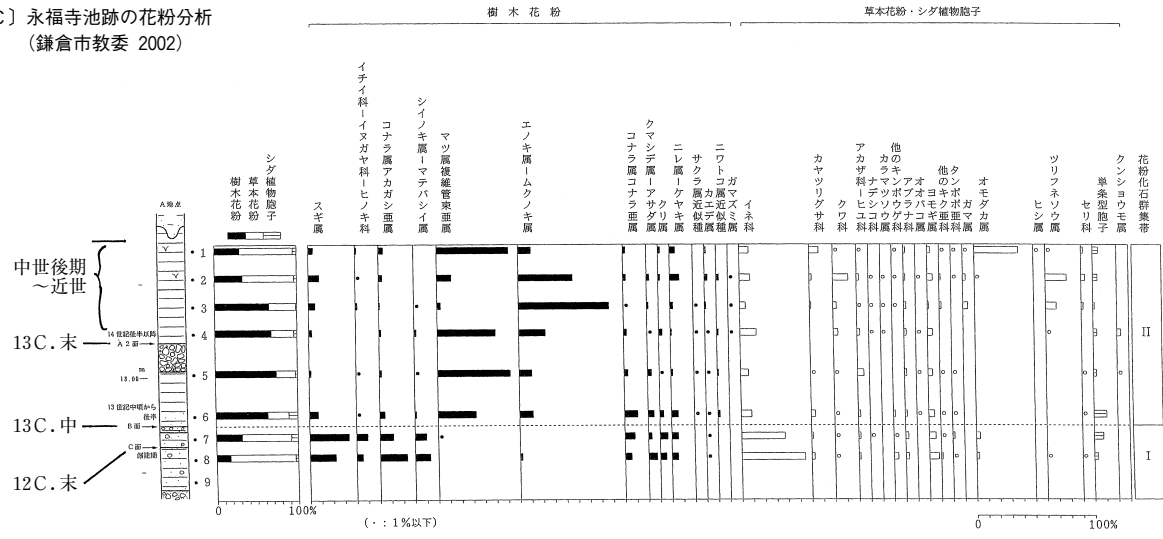
〔表B〕北条政村屋敷跡遺跡 プラントオパール分析（鎌倉市教委 1994）

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ属型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
2	6,300	148,400	7,600	6,300	6,300	3,800	5,100
3	11,000	233,300	11,000	20,500	33,100	4,700	25,200
4	20,900	357,700	19,300	16,100	33,800	25,800	19,300
5	2,300	327,500	18,600	18,600	51,100	16,300	11,600
7	0	233,400	14,600	14,600	60,800	14,600	26,700
9	10,000	220,100	15,700	8,600	1,400	20,000	22,900
1 0	2,700	229,700	18,800	10,700	2,700	13,400	21,500
1 1	9,600	217,200	8,200	12,400	1,400	23,400	33,000

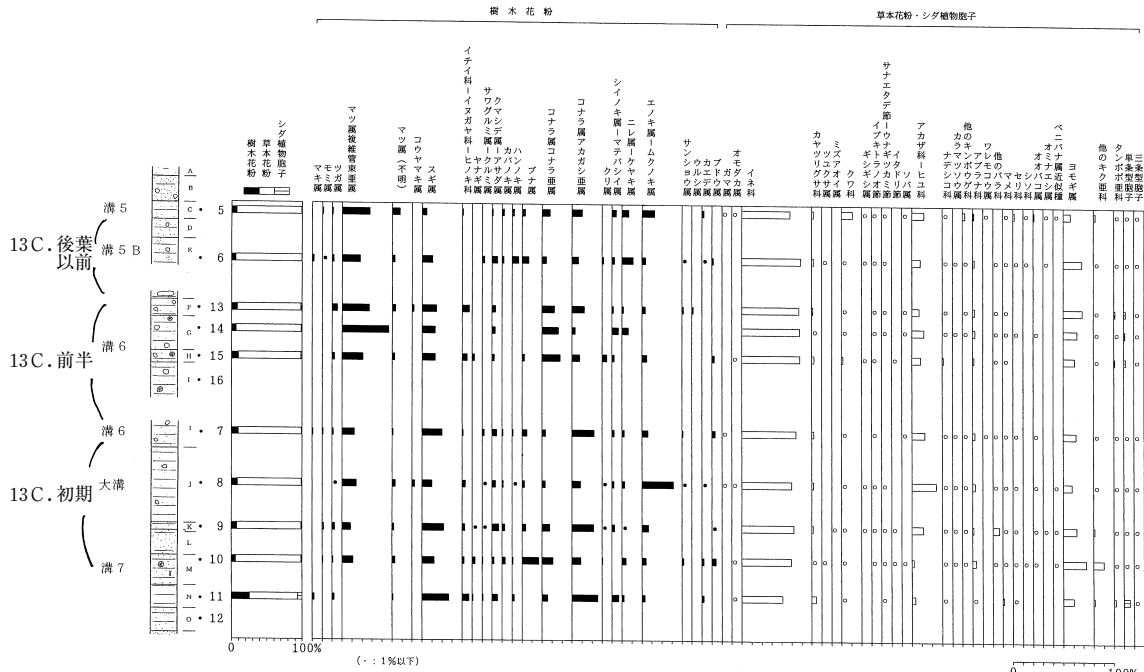


深掘りのプラント・オパール分布図

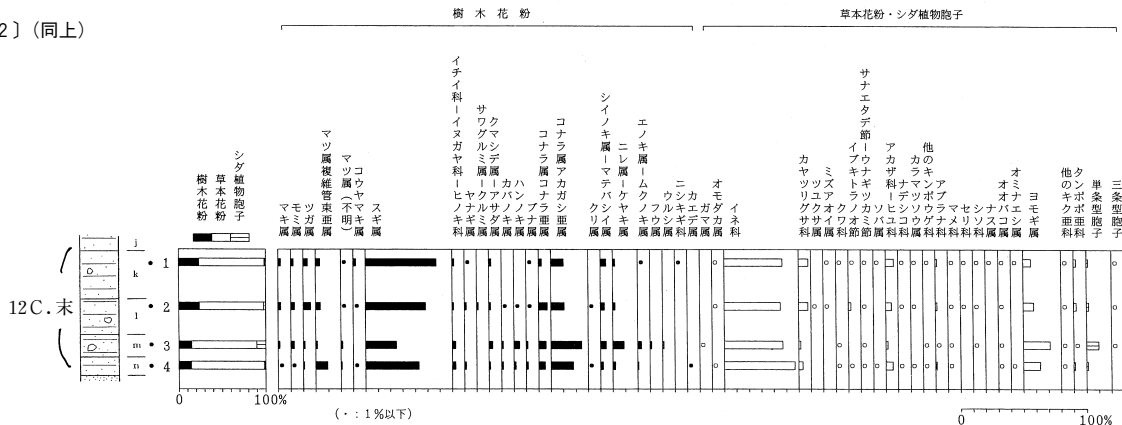
〔表C〕永福寺池跡の花分析（鎌倉市教委 2002）



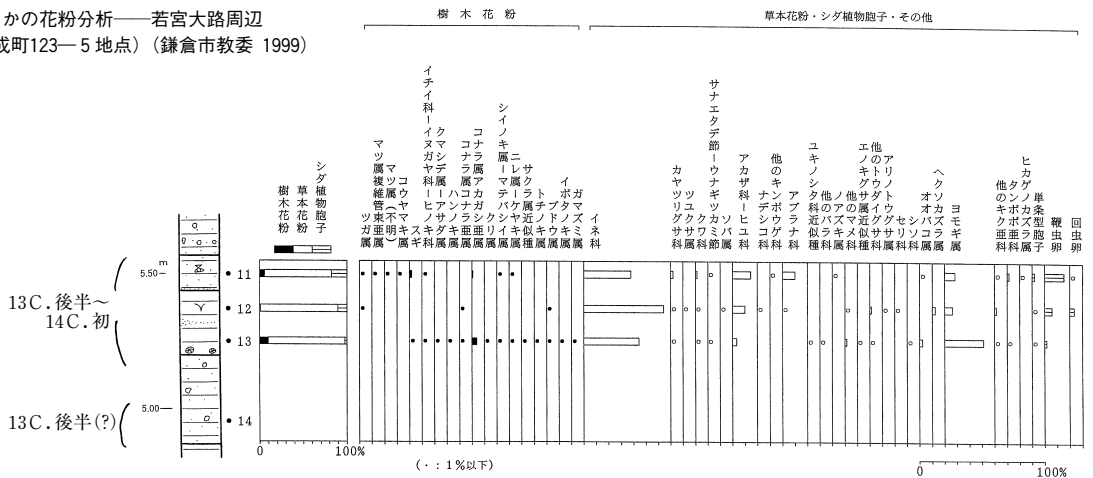
〔表D-1〕 街なかの花粉分析——北条小町邸跡（鎌倉市教委 1996）



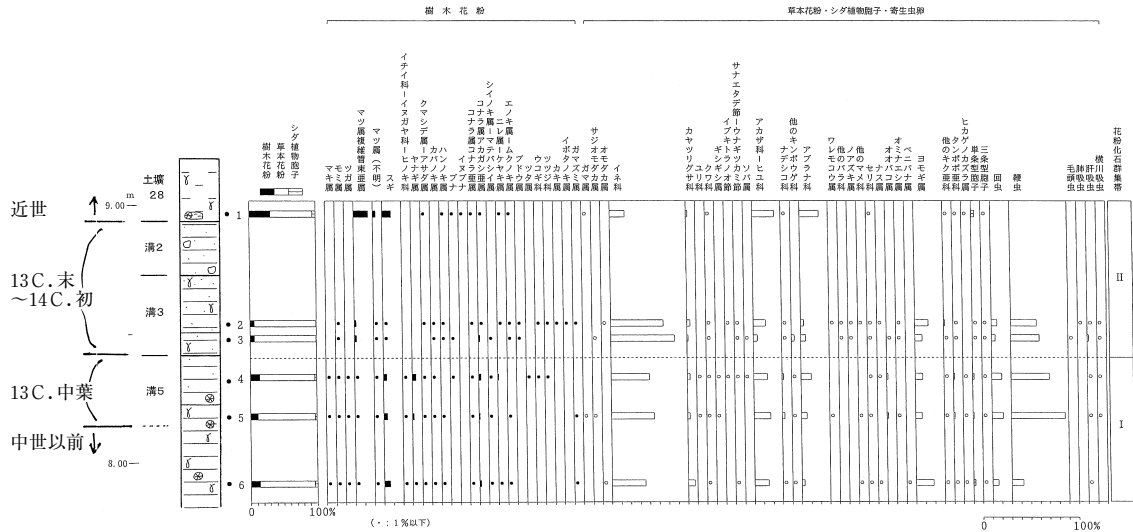
〔表D-2〕 (同上)



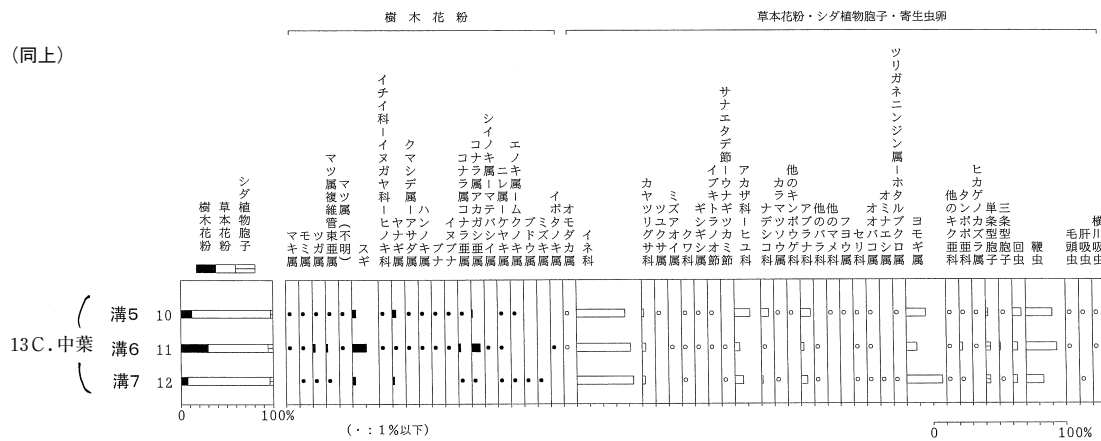
〔表E〕 街なかの花粉分析——若宮大路周辺
(御成町123—5 地点)（鎌倉市教委 1999）



〔表F-1〕 街なかの花粉分析——政所跡（鎌倉市教委 2001）



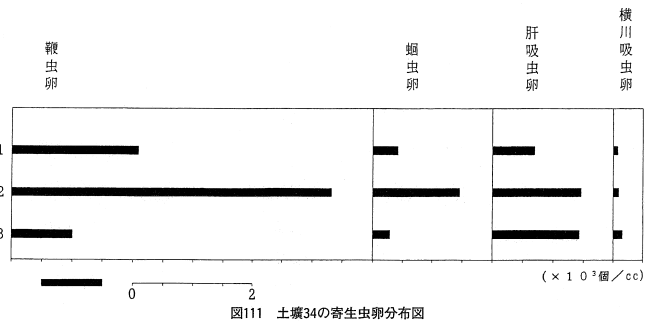
〔表F-2〕 (同上)



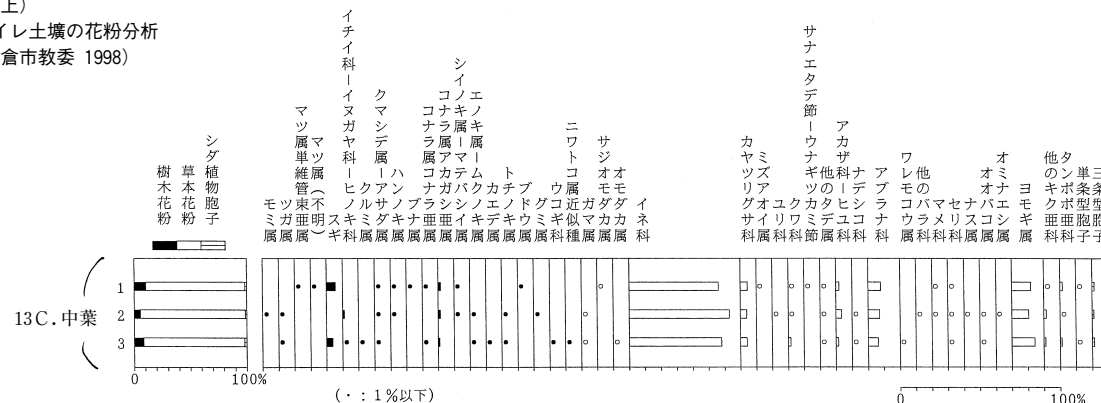
〔表G〕 時房・顯時邸跡のトイレ土壌の寄生虫分析（鎌倉市教委 1998）

表9 試料1cc当たりの寄生虫卵数

試料No.	全寄生虫卵	鞭虫卵	蛔虫卵	肝吸虫卵	横川吸虫卵
1	3355	2171	395	691	99
2	8311	5280	1467	1467	98
3	2860	1027	293	1393	147



〔表H〕 (同上)
トイレ土壌の花粉分析（鎌倉市教委 1998）



ところで、イネ科花粉がどの地点でも見られることをどのように理解すべきであろうか。検出された遺構の密度からは、恒常的に稲作を行なう余地は鎌倉にはあり得なかつたろうし、農耕具の出土もまず皆無に近い。イネ科の草本類ということでススキやヨシ等の荒廢地の草を想定するとよいのだろうか。また鎌倉を囲む丘陵の外周からの飛散というのも、樹木花粉と併せるなら無理があろう。先のプラントオパール分析からはイネ以外のイネ科植物を想定してもよさそうだ。それ以外に考えられることは、稲の粉、藁などに付着して来たものの再堆積であろうか。鎌倉の人口数万に対して搬入される米、それを入れる俵、荷を縛る藁縄（千葉地遺跡で検出されている）、飼葉としての藁、板草履の表としての藁など、鎌倉の街なかにイネ花粉が付着するものは限りなくある。堆積土中のプラントオパール（植物珪酸体）分析により、イネ科の中の種まで解明できようが、藁への付着については否定も肯定もできないのが現状である。

2 庭園と植栽

鎌倉の寺社内には、広い平坦地があり、庭園が造られ植栽がなされていたようだ。また周囲の丘陵の植生も観賞の対象であったが、將軍御所や個人の邸宅でもちょっとした庭作りをしたり花樹の植栽もなされていたようだ。考古学的調査で植栽を語ることは困難だが、文献と併せ少し検討してみたい。

a) 永福寺の桜

鎌倉の桜の名所は永福寺であったようで、將軍が花見に行ったという記事は『鏡』の建仁三年（1203）、建保五年（1217）、安貞三年（1229）、建長三年（1251）、正元二年（1260）、などに見える。ただしこの桜が植栽されたものか、丘陵に自生した山桜かははっきりしない。

b) 寺社・邸宅の庭と植栽

鶴岡八幡宮では、文治四年（1188）に大庭景義が馬場の辺に警備小屋を建てたが、その庭上には多くの樹を植えたという。紅葉の頃には頼朝がこれを観ている（『鏡』）。また寛喜三年（1230）の『鏡』の記事では、石階の西辺に（現在は大銀杏があるが）梅の木があったことが知られる。

勝長寿院では建久五年（1194）に、三浦・渋谷方面から取り寄せた竹数十本を裏山の麓に植え、頼朝はこれを観たという（『鏡』）。寺内に竹林をつくろうとしたのだろうか。

鎌倉の東北部、大倉の大慈寺に、建暦二年（1212）將軍実朝が訪れているが、そこは山水奇岩があり、河あり山あり、水木ともにその便を得た仙室のようだという（『鏡』）。永福寺の庭園でも汀の奇岩には遠方から運ばれた火山岩などもあり、寺の庭の造作は植栽以上に人工的なものであったろう。

寺院の庭園で発掘されたものとしては瑞泉寺の庭園（図26）が有名だが、似たものは無量寺跡でもみつかっている（博通 2003）。建長寺（13世紀中葉開創）では三門と仏殿の間の中庭に柏槿が植えられたことが『建長寺指図』より明らかで、その老樹は今ものこる。また指図では方丈の裏に池が描かれているが、発掘によれば創建時から岩盤を深く掘り下げたもので、近世まで使い続けられたことがわかっている（鶴見大学・博通 2003）。これらの岩盤掘削による庭は樹木を植えるには向かないので、後世の枯山水の起源と考えて良いかもしれない。

將軍邸である幕府内にも庭があり、植栽がなされていた。『鏡』には、

- * 寿永三年（1183）御亭の庭の桜を観る。
- * 文治二年（1186）重陽の節、菊花が献上され、南懸の流れを移して、北面の壺に栽えた。

- * 建永二年（1206）北の御壺に桜・梅等の樹を多く植えた。永福寺より移したものである。
- * 承元五年（1211）永福寺より梅樹一本を御所の北面に移植。北野の種である。

と見える。また御所内には鞠場があり、四方懸の樹が植えられている。

- * 建仁二年（1202）相模の国積良より古柳を石の御壺に移植する。良木でない。
- * 建仁二年（1202）御所の北の御壺に切立を構える。皆松を用いる。
- * 文應二年（1261）来月鞠初めがあるのに懸一本が枯れた。期日まで補充を命じた。

最後の記事は大倉幕府（頼朝以来の御所）ではなく、若宮大路幕府でのことである。

また御所ばかりでなく、高位の者の鎌倉邸宅には庭があり花樹もあったようだ。『鏡』には、

- * 文治三年（1187）比企の尼の家の南庭に白菊が咲いた。頼朝と政子が訪問。
- * 正治二年（1200）大江広元の亭後の山麓に新造の屋ができた。山水あり立石あり、納涼逍遙の地である。
- * 建仁二年（1202）三月、頼家は比企能員宅へ入御、庭樹の桜が盛りであった。
- * 建仁二年（1202）十月、頼家は三善康信宅を訪問。庭樹の紅葉が見事だった。
- * 貞永二年（1233）將軍頼経、北条氏亭に入御。東の壺の卯の花、なでしこが盛りであった。

と見える。発掘で武家屋敷の庭の様子が明らかになったのは、今小路西遺跡（御成小学校内）の例くらいであろうか。北側の最高級の武家屋敷では、寝殿南面の広庭が海砂敷きにされ、盆栽の植木鉢もみつまっている。広庭の西奥の側は黒い玉砂利敷きになり、両者の間には曲水ふうの屈曲溝が配されていた。南側の「田舎ふうの」武家屋敷跡では、母屋東側の広庭が馬場になっていて、塀ぎわに植木をうえたような穴が連続してみつまっている。また母屋の裏手には壺庭のようなせまい空閑地があった（河野 1990）。兼好法師も『徒然草』の中で、「家にありたき樹は梅松桜・・・」と述べているが、こうした庭と植栽が街全体の環境を左右して、花粉分析にそれと見出せるほどの影響を与えていたとは思えない。

また庭に菜園を造ったり、邸宅や庭宅の裏山などに食用・薬用の植物を植えたりすることも、小規模ながらあったようだ。『鏡』に、

- * 文治二年（1186）頼朝と政子が比企の尼の家を訪問。樹陰納涼の地であり、菘園に興きがあるからだ。
- * 仁治三年（1241）御台所、石山局の里亭に渡御。辛蒜を食べるためだった。

と見える。また『金沢文庫古文書』には、

- * 文保年間（1317～19）頃、称名寺の茶園が利を得るため出荷を遅らせたのではないか、（順忍が釵阿にあてた書状、金沢文庫文書1516）
- * 元徳二年（1330）頃、こちらの山で女房達が拾った栗を贈る（めうせう書状、金沢文庫文書2106）
- * 正慶二年（1333）前後、称名寺のちしゃ苗をもらって植えようと思う（了純書状、金沢文庫古文書2284）

などに見える。『徒然草』には鎌倉から上った陰陽師が、兼好法師宅の庭を見て、道筋ひとつ残して葉種でも植えるべきだと指摘している。しかし、これにしても鎌倉全体の植生や環境を左右するほどの規模ではなかったろう。むしろ、都会地の中の数少ないぜいたくな楽しみだったのではないだろうか。

3 動物から見る鎌倉の環境

鎌倉の発掘では、溝や土壌から動物骨や貝殻が多く出土する。その大部分は食料に関連し、一部は工芸材料に関係しよう。そしてそれらの動物の多くは鎌倉外から搬入されてきたと考えられるが、一部は周辺環境より捕獲されたものではないかと思われる。そうしたものと、文献に見られる動物関係の記事から、鎌倉の環境の一端がかいま見えよう。

A) 動物怪異から

『鏡』には、将軍御所や八幡宮等で動物が常と異なる動きをすると、吉凶の占いをしたことが瀬出する。それらを列挙すると（年号は西暦数字のみ記す）、

御所の北山麓に狐が子を生む(1186)／黄蝶飛行し鶴岳宮に集まる(1186)／大庭景能宅前に狐斃る(1188)／鶴岳若宮の西の廻廊に鳩来て去らず(1202)／若宮宝殿の棟にとまった鳩急に落死す(1202)／八幡宮経所と下廻廊間で鳩三つが喰い合う(1203)／御所進物所と寝殿に青鷺飛び入る(1207)／鶴岳上宮に羽蟻飛散(1212)／御所南庭で狐鳴く(1213)／御所の西侍の上に鷺集る(1215)／前浜・腰越に死んだ鴨寄る(1219)／若君の御衣、鼠に喰い破らる(1223)／西の鞠壺で烏の糞かかる(1223)／若君御亭南廊に鳥巢つくる(1224)／御所の内を千鳥飛行す(1225)／御所中に鳶飛入(1225)／幕府の畳の上に犬の糞あり(1227)／将軍の御衣に鳶の糞かかる(1228)／竹御所寝殿南面に犬伏す(1228)／御所の常の御座の畳に犬の糞あり(1229)／幕府小御所の上に白鷺集る(1230)／烏、御所進物所に飛入(1231)／御所北面の御簾に烏の糞かかる(1232)／御所寝殿の棟上に鳥巢を造る(1235)／常の御所に鳶飛入(1246)／羽蟻鎌倉中に充満す(1247)／黄蝶鎌倉中に充満(1247)／黄蝶群れ飛ぶ(1248)／幕府南庭に狐鳴く(1250)／御所東侍に鳶飛入(1260)／御所北の対と台所の間に海黒鳥飛び落つ(1261)／御所台所に鳶飛入(1261)／北条時宗の御亭に鷺集まる(1263)

といった具合である。これらの登場する動物は、種類が限られ、かつ鎌倉が都市化する過程で顔ぶれが変わるわけでもない。動物の種類としては、現在の鎌倉でもよく眼にするものばかりである（さすがに狐は出ないが、アライグマ、ハクビシン、タイワンリスなどの外来動物が住みついている）。都市化に伴う環境悪化を云うならば、烏と鼠が該当するくらいかもしれない。しかし、発掘調査で出土する動物骨には、カラスやネズミはごく稀で、居たとしても殺して食糧としたわけではなかったのだろう。

B) 鎌倉近辺での狩猟

鎌倉の中央平野部は宅地化され、丘陵地帯も地形改変がなされる中で、狩猟がおこなわれたかどうかと考えたとき、下の二例の『鏡』の記事にであった。

* 建仁二年（1202）雪七寸つもる。将軍頼家は鷹場を観るため山内庄やまのうちに出る。帰路平知康、亀谷の辺で落馬、古井戸に落ちる。

* 暦仁元年（1239）大雪降る。北条経時、三浦義村らと山内の辺を逍遥し、雉兔を多く獲る。

両記事とも、山ノ内（今日の北鎌倉一帯）に建長寺や円覚寺が創建されるより以前で、まだ都市化の波及がなかったことを示しているだろう。発掘によると、今日の北鎌倉駅近くは、鎌倉後・末期には庶民住宅が充満した風景を考えうるといふ（宗臺 2005）。

鎌倉の東北方、永福寺の北奥に杉ヶ谷という谷があり、この発掘では狩猟の結果が認められている。鎌倉幕府滅亡後の14世紀後半代の屋敷跡があり、井戸の中から折れた弓と大量の動物骨が出土し

た。動物骨の鑑定によれば、シカ・イノシシ・ウサギといった狩猟対象獣もあるが、ネズミ・モグラ・ヒキガエル、さらにはイヌの骨も多くあった（福田 1993）。シカ・イノシシなどは鎌倉武士は遠方にまで狩に行き獲ってくるのが『鏡』などに見えるが、ここでは鹿幼獣やメスなどがみられ、畑の害獣駆除という見解もなされている。モグラやヒキガエルなどは近隣の自然環境から得たとしか考えられない。実にわびしい食糧であるが、そういった動物の居た環境を想定できる。14世紀後半には永福寺はまだ存続していて、この宅地も寺地内にあったはずだが、「殺生禁断」は守られていなかったことになる。なお、イヌについては鎌倉時代の八幡宮境内でも食用にされており、鎌倉人にとっては禁忌食ではなかったと思われる。さらに鎌倉の街なか（図31）には、「犬追物」用の犬が野良犬としてウロついていたと思われるが、それは都市的環境の一部といえよう。

4 浜の風景

鎌倉南西部は砂丘地形にのっていることはI章でふれておいた。貞応二年（1223）の紀行『海道記』では由比の浦の浜に、直接船をひき上げたような描写が見られるが、貞永元年（1232）には往阿弥陀佛の提言で和賀江の築港がなされ、鎌倉の港湾機能は整備された。それでも弘長三年（1264）秋の台風では、由比の浦の船が漂没し、死人が浜に漂着している（『鏡』）。13世紀後半までには由比の浜辺一帯には地下倉が数多く設置されたことが、発掘の結果わかっている。倉の持ち主・管理者が誰であったかという社会的なことは措くとして、浜の住人には職能民が多くいたことが、韃の羽口（鍛冶師）や加工骨角（骨細工師）の出土からうかがえる。彼ら手工業者の原材料は鎌倉の外から搬入されたであろう（例えば刀の部品である筭こしがいや栗形を作る鹿の中足骨や角は、狩猟成果から分与されたと思われる）が、加工の際に出る屑は工房の周囲に捨てられたようだ。浜には都市中心部から排出されたゴミも投棄されたようで、さらに後述のように都市民の遺体遺棄も行なわれた。浜の発掘で花粉分析は何回か試みられているが、砂地のため花粉の滞留が見られなかった。とはいえ、風景としては樹木が少なく、少し風が吹けば砂が舞う、殺風景なものを考慮せざるを得ない。貞応三年（1223）夏、鎌倉を含む近国の浦々に大魚（イルカか）が流れ着き、三浦・六浦・前浜などに充満した。鎌倉中の人はいそいでその肉を買い、煎じて油をとった。その異臭は巷に満ちたという（『鏡』）。同様に、前浜に漂着した「ねづみイルカ」を煮たために煙が充満して臭かったという話が『日蓮書状』にも見えている。由比ヶ浜南遺跡（滑川河口の西側の波打ち際）では、13世紀代に牛馬とイルカの頭骨を一列に並べた遺構が検出されているが、迷走イルカという天の贈り物が利用されているのも、浜の風景の一断面だろう。

5 都市民の排出するもの

前浜から谷奥まで数万の人口が密集した都市で、専ら消費的生活がなされるなら排出されるゴミはなまじの量ではなかったはずだ。幕府は建長三年（1251）に小町屋免許の地を定めると共に、「牛を小路につなぐな」、「小路を掃除せよ」との法令を発している（『鏡』）。また弘長元年（1261）には、在家の前々の掃除、病者・孤児・死体を路辺に捨てるな等を令している（『鏡』）。にもかかわらず、発掘された鎌倉の街では、溝には陶片や木っ端、食べ物残滓、動物遺体（ときに人骨も）が捨てられ、ちょっとした凹地にも、川の流れもゴミ捨て場と化している。御成小学校内の南側屋敷では大きなゴ

ミ穴が掘られている。図4に示した千葉地遺跡の道路側溝（図4）のように、ときどき浚渫をしないと溝などすぐに埋まってしまったようだ。これには水はけの悪い地形も影響しようが、基本的にはゴミ処理システムが無かった都市のさだめであろう。

また、浜の方で行なわれていた皮革加工や、街なかのいたる所で行なわれていた金属鑄造、そして牛馬の死体や糞など、今日の大気汚染には及ばないものの、異臭さわぎは瀬繁であったろう。

そして都市の宿命でもある人の糞尿の始末の問題がある。先にあげた花粉分析のダイアグラムに寄生虫卵の分析が加えられた表E、表F-1・2でわかるように、市街中心部の水流ある溝は、ことごとくトイレを兼ねていたようである。その他に、しゃがむための渡し板のある土壌や、寄生虫卵の検出された土壌のようにトイレ穴である可能性が高いものも数例検出されている（馬淵 1995）。しかし、居住的な建物の数に比較したら、トイレの数はごく限られていて、鎌倉は糞便臭に満ちた街だったかもしれない。近世江戸の町が近隣農村への肥料供給源であったことを思うと、下肥利用の未発達な都市の環境は、荒廃したものであったろう。

6 都市民の墓と環境

先のⅡ章で、地形改変の一因に「やぐら」という墓の造営をあげておいた。現在までのところ、やぐらの被葬者は武士・僧侶階級に限られそうである。すると、武家屋敷に奉公しているものや、町屋にいた職能民、商人たちが鎌倉で死んだとき、どこに墓を求めるのだろうか。その答は、浜地に見られる土葬墓や、遺棄死体の集積などとなる。古くは昭和27・28年に材木座（というのが滑川西岸）で千体を越す人骨が出土し「合戦の犠牲者」とされている（鈴木 1956）。さらにその南方の一ノ鳥居東方地点では200体以上の人骨が大きな穴に投げ込まれた状態でみつまっている（原他 1992）。また由比ヶ浜南遺跡では同規模の集積穴が数箇所みつまっている（図32、齋木 2002）。それらの地点では「遊離人骨」とよばれる部分骨の出土もある。人骨集積穴に投げ込まれた遺体は五体揃ったものもあるが、四肢を失ったものや頭骨のみのものも多い。性別・年齢は老若男女さまざま、刀創や刺突創を留めるものはさほど多くない。中には牛馬骨が人骨に混じっている場合もある。そこから考えられることは、浜辺に都市民の遺体が、あるものは埋葬され、あるものは打ち棄てられた状態だろう。遺棄されたもののうち肉部が無くなり骨格の一部が欠けたものも含め、ある時期に大きな穴に集め埋められたと理解できよう。さきに浜の風景を荒涼と述べたが、地下倉が建ち並ぶ先は死の世界となっていたわけだ。広い砂浜に、百年間で数千体の遺体があったとて、自然環境に及ぼす影響はさほどではなかったろうが、当時の人々の環境認識といった点では大きなものがあったろう。

IV その後の鎌倉

元弘三年（1333）新田義貞による鎌倉攻めで、鎌倉は炎上して果てたように『太平記』は伝えている。しかし、鎌倉の発掘で、この時期の火災痕をはっきり確認できる地点はまれである。北条高時以下数百人が自害したという東勝寺跡では、寺の再建はなされなかったものの、周囲の丘陵を切り崩した土丹で厚く埋め立てられ、その上に「得宗権現」との伝承をもつ小堂が建てられた（鎌倉市教委 1978）。

中央平野部での発掘では、若宮大路側溝の浚渫が行われなくなったり、遺構・遺物の減少傾向が認められる。これは、政治・軍事の中心が京都室町へ移ったことによる人口減少が大きくかかわっているよう。14世紀中頃に足利公方による鎌倉府が開かれても、足利公方屋敷の周辺をのぞくと、人口回復はなかったようだ。15世紀前葉までには、中央平野のかなりの部分は空閑地や農地になっていたようである。近世に至るまでのある時期としてしか特定できないが、表Fに見るように最上層でイネ科花粉が激増しているのはその証左かもしれない。鎌倉時代には栄えていた御成小学校内地点では、14世紀末頃の建物跡や15世紀前葉頃の井戸が検出されているが（河野 1990）、遺構は散在状態である。

若宮大路の東側を描いた『善宝寺寺地図』（室町時代）では、寺地周辺に笹が茂っているさまと、高木のない寂しい風景が見られる。この地の一角が発掘調査されたが、やはり室町期の遺構は検出されなかった（博通 2006）。

この時期について花粉分析の事例はほとんどない。遺構・遺物が少なく、土層の時代判別が困難であること以上に、分析してみるほどの価値無しと現場担当者に判断されてしまったためかもしれない。それでも、永福寺の池跡堆積土の上層では、イネ科が増加しないのにカヤツリグサ、オモダカ、ヒシ属が認められ、湿地環境があったと思われる（表C）。

永福寺は応永年間（15世紀前葉）で廃絶してしまうが、南北朝動乱期を生きのびた寺社ではあいかわらず環境破壊的な造成が続けられている。建長寺境内の発掘では、応永廿一年（1414）の火災で焼けた器物や廃材を池中に投じているが、その復興には土丹を厚く盛り、鎌倉石切石をふんだんに使っている（博通 2003）。また鶴岡八幡宮境内では、天正十八年（1590）に徳川家康らによって修理される回廊などのある層の下に、2～3面の土丹盛り土層と鎌倉石切石の使用が認められている（鶴岡八幡宮 1980）。これらの工事にともなっては、現在の地形に残る掘削痕跡のうちのなにかは切り崩されていたわけだし、鎌倉石の切り出しも継続していたのだろう。また「やぐら」の造営は、紀年銘のある石塔を信じるならば、15世紀中頃までは、盛んだったようである。

戦国時代の鎌倉に関する記録は乏しいが、小田原北条氏により、今日の大船駅の北西方には巨城玉縄城が築造された。それに伴い、鎌倉周辺の丘陵が小規模な砦として利用されたこともあったろう。北鎌倉の台峯地区の分布調査では、時期不明ながら掘割道や井戸状の四角い穴などが確認されている（筆者のメモより）。

近世の鎌倉については、地誌類や名所案内図に見られるような、半農半漁の鄙びた風景を想定してまちがない。近世村絵図では、寺社の周りに若干の家が描かれているくらいで、平野部の多くが田や畑として描かれている。ただ興味深いのは、明治初期の地籍図に記された耕地の境界の中には、鎌倉時代の地割りと合致する線が認められることがある（河野 1993）。都市が衰退したあとも、後代の土地利用が以前の区画を踏襲しがちなことは、各地の条里跡と同じなのかもしれない。

それと、近世においても寺社の復興などによる地形改変は小規模ながら続いていたはずである。徳川幕府は八幡宮を整備するし、水戸家の姫が入る英勝寺の造営、「縁切り寺」東慶寺の整備、建長寺の堂舎の復興などがあげられるものの、都市の成長期におけるほどの規模とは考えられない。

平野部では八幡宮周辺で旅籠宿の存在が発掘でもみとめられているが、僅かな軒数にすぎない。丘陵部でも段々畑の開墾や、横穴式の「柵井戸」の開削、鎌倉石の切り出しなどはあったが、やはり小規模で、一地域の環境を大きく変えるほどではなかったと思われる。

近代以降については、たどって行けばいろいろ興味深いことはあるのだが、通史的記述は本稿の目的ではないので以上にとどめたい。

おわりに

以上、かなりの紙数を費やして鎌倉の環境変化を追ってみたが、いまひとつ鮮明さを欠く。鎌倉初期の地形、都市化に伴う丘陵の開発、人口集中による都市内部の環境悪化、都市衰退による空地の増加と農村化という流れは、ある程度追うことができるが、それが当時の社会においてどのように認識されていたかについては、史料に頼らざるを得ないし、またその史料の少なさという制約を突破できていないと思われる。近年、中世考古学と歴史地理学などが共同して、一定地域の「景観」を復原しようとする試みがなされているが、時間経過を追って動的にみるところまでは行っていないようだ。本稿でとり上げた鎌倉は、時間経過を追うことができる貴重なサンプルであり、かつ「都市化」という現代に生きる問題をも扱える場であるはずだ。それでも結局は資・史料の制約という壁にぶつからざるをえないとしたら、鎌倉ほども資・史料が残っていない地域については環境変化などは研究しえないことになる。やはり、資・史料の少なさを補うためには新たな資料の検出—たとえば発掘調査の密度と精度をあげることや、花粉分析をはじめとする自然科学的な分析を増やすこと—が必要となってくるとと思われる。

また、民俗学的な資料のもつ年代遡行の難しさに対して、歴史考古学のタイムスパンをのぼして（降らせて）行くこと、つまり近世考古学ともっとまともに取り組むことも必要かと思われる。この点については本稿の取り組みも不十分であったが、いずれ機会を見てその努力を示したいと考えている。

参考文献

第I章

松島義章

1974「鎌倉の壮積層」『神奈川県立博物館調査研究報告 自然科学』第5号。

河野真知郎

1986「鎌倉の武家屋形と都市住宅」『仏教芸術』164。

河野・清水

1993「中世鎌倉の断面図」『朝日百科・歴史を読みなおす』⑥。

辰巳和弘他

2005「新島襄が写生した埴輪」『同志社大学歴史資料館報』第8号。

河野真知郎他

1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会。

鈴木茂

1999「神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集 国立歴史民俗博物館。

河野真知郎

1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会。

齋木秀雄

1989「鎌倉の地形を復原する」『よみがえる中世3－武士の都 鎌倉』平凡社。

第Ⅱ章

鎌倉市教育委員会

1996『化粧坂周辺詳細分布調査報告書（国指定史跡化粧坂・日野俊基墓周辺の鎌倉街道上ノ道に関わる街道・城郭遺構等の詳細分布調査報告書）』。

1998『亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査』。

1999『大仏切通周辺詳細分布調査報告書－国指定史跡「大仏切通」に関わる古道および城郭遺構等の調査報告－』。

2001『切通周辺詳細分布調査－「朝比奈切通（国指定史跡）」「極楽寺切通」「杉本城跡・釈迦堂切通」「材木座地区」における古道および城郭遺構等の調査報告－』。

2002『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備地業に係る発掘調査報告書－遺物編・考察編－』。

2003『神奈川県鎌倉市 五合栢遺跡（仏法寺跡）発掘調査報告書』。

神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団

2001『『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』。

金沢文庫

2002『称名寺の石塔－中世建築と石塔－』。

横浜市教育委員会

1998『史跡称名寺庭園苑池保存整備報告書』。

田畑佐和子

1991「『やぐら』の研究（1）－鎌倉における分布と遺物について－」『中世都市研究』第1号 中世都市研究会（後に中世都市研究同人会に改称）。

上行寺東やぐら群遺跡発掘調査団

2002『上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書』。

浜野浩美

2002「亀井砦跡の調査－石切遺構を主体として－」『第12回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会。

永田勝久・福田誠

2001「鎌倉出土「かわらけ」の化学組成分析（中世在地産土器の基礎研究）」『鶴見大学紀要』第38号 人文・社会・自然科学編 鶴見大学。

永田勝久・福田誠

2002「鎌倉の岩石・粘土の化学組成分析（中世在地産土器の基礎研究2）」『鶴見大学紀要』第39号 人文・社会・自然科学編 鶴見大学。

手塚直樹

1989『佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目620番地点』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団。

河野真知郎他

1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会。

第Ⅲ章

石井進

1989「文献から探る人口」『よみがえる中世3－武士の都 鎌倉』平凡社。

河野真知郎

1989「発掘から試算した人口」『よみがえる中世3－武士の都 鎌倉』平凡社。

有限会社博通

2005『無量寺跡発掘調査報告書』。

鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・有限会社博通

2003『史跡 建長寺』。

宗臺秀明

2005「円覚寺門前遺跡（No.287）山之内字松岡1344番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』（第2分冊）
鎌倉市教育委員会。

福田誠

1993「永福寺跡（No.61）二階堂字杉ヶ谷520番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』（第1分冊）
鎌倉市教育委員会。

馬淵和雄

1995「米町（大町2－2315地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』。

鈴木尚

1956『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』岩波書店。

原廣志他

1992「由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）由比ガ浜二丁目1034番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』（第1分冊）鎌倉市教育委員会。

齋木秀雄他

2002『由比ヶ浜南遺跡』由比ヶ浜南遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会。

鎌倉市教育委員会

1994「北条政村屋敷跡（No.131）常盤字殿入下643番4外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』（第2分冊）。

1996「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）（No.282）雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』（第2分冊）。

1998「北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目272番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』（第1分冊）。

1999「若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町123番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15』（第1分冊）。

2001「政所跡（No.247）雪ノ下三丁目989番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』（第1分冊）。

第IV章

鎌倉市教育委員会

1978『東勝寺跡－第3・4次遺構確認調査報告書－』。

河野真知郎他

1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会。

鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団・有限会社博通

2003『史跡 建長寺』。

鶴岡八幡宮

1983『直会殿用地発掘調査報告書』。

河野真知郎

1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会。